

『アネリーダとアルシーテ』

— チョーサーの人間理解について —

西 田 栄 毅

I

この詩は、制作年代についても判然としないし、その典拠についても、チョーサー自身が作品の中でスタティウスの名前を挙げているにも拘らず、不明である。というのは、チョーサーは明示していないけれども、ボッカチオの *Teseida* から借用したと思われる描写が散見せられるからである。したがって、F. N. Robinson は、“He may even have had no literary source for the simple and conventional plot, and therefore no plan for continuing it beyond the *Complaint*”¹⁾ と述べている。

こういう具合に、書籍のうえからその典拠が確認できないものだから、この詩を実在の人物との関連において把えて、“personal allegory”として解釈しようという試みがなされたが、これも十分な説得力は持ちえなかったようである²⁾。

したがって、この試論では、以上のことを考慮にいれたうえで、他の初期の作品と比較しつつ、チョーサーの作品の中で占めるこの詩の位置と意義を考えてみたい。

チョーサーは“愛の詩人”と言われるほどに、愛に題材を採った詩を幾編も作っている。しかし、彼が愛の詩人としての本領を発揮するのは、宮廷愛の形式的な求愛や成就した幸せな愛を描く時ではなく、運命のいたずら、あるいは恋人の裏切りによって悲嘆の淵に沈んで、生ける屍のようになりながら、断ち切れぬ恋慕の情と募る恨みをせつせつと訴える、哀れな恋人たちを描く時のよ

うだ。何故であろうか。悲劇的な愛の方が幸福な愛よりも、読者に訴える力が強いからであろうか。不幸な恋人たちを描く時に、チャーサーの筆に我知らず力が隠るからであろうか。いずれにしても、チャーサーが愛の悲劇に対して、強い関心を抱いていたことは否めない事実である。この『アネリーダとアルシエーテ』もそうした悲劇的な終焉を迎えたある愛の姿を描こうとした——少なくとも、現存する未完の状態から推測しうる限りは——作品と言えよう³⁾。

ところが、詩全体の内容とはおよそさわしからぬ「祈願」で、この詩は始まる。先ず、チャーサーが祈りを捧げるのは、軍神マルスであり、次いでその妻ペローナとアテネの守り神パラスなのである。こういう「祈願」がふさわしいのは、戦記物語の叙事詩においてであろう⁴⁾。この点も、作品が未完であるということと相俟って、チャーサーの意図を知るうえで厄介な障害となっている。確かに、この詩の「物語」の導入部では、背景として戦争への言及はあるけれども、詩全体からすると、量の点からも内容の点からも、副次的なものである。したがって、全体の内容に即した解釈を試みても不可能のように思われる。チャーサーには何か新しい考えがあって、伝統的な型を破ってみようとしたのかもしれないが、それを立証するにはまだ資料が乏しいようだ⁵⁾。

II

「物語」は、テーベがギリシアとの激しい戦いの後、荒廃し、王家の血筋の絶えたのに乗じて、“old Creon” が支配権を握り、専制君主として圧政を恣にしていた頃の話として始まる。アルメニアの王女アネリーダはこのテーベの町に住んでいた。その美しさは空に輝やく太陽をも凌ぎ(“That fairer was then is the sonne shene.” (73)), その名は世界に遍く知れ渡り、すべての人が彼女に一目会いたいと望んだ。というのは、“as of trouthe, is ther noon her lyche, Of al the women in this worlde riche.” (76-77) だからである。年齢は20歳と若く、背丈は高からず低からず、その“stidfastnesse”に関して言えば、ペネローペやルクレースをも凌駕していた。一言で言えば、彼女は一点の非の打ち所もない女性であった(“yf she shal be comprehended, In

her ne myghte no thing been amended.” (83-84))。

他方、アルシーテはテーベの町で若くて頑健な騎士であったが、愛においては裏表があり、その態度には率直さがなく (“he was double in love and no thing pleyn.” (87)), 手管を弄することにかけては誰よりも巧妙であった。彼はその狡猾な知恵 (“kunnyng”) を用いて、この世にも美しい女性を我物とした。

この二人の人物描写は、伝統的な常套表現で、『トロイルスとクリセイデ』において見られるような、状況に応じて微妙に揺れ動く心理によって織りなされる、深味のある文彩もなく平板である。こういう不満は近代的な文学理論の立場からの意見のように思われるかもしれないが、チャーサー自身も同じような不満を抱いたと解釈してもよい節が見られる。しかしながら、伝統的な詩型と表現様式に従って描かれた人物は、当時の聴衆ないしは読者に明確なイメージを与えたに違いない。それが定型化した表現様式の一つの長所でもあろう。アネリーダとアルシーテの描写は、そのような類の表現様式の典型として理解することができる。ここでもう少しその記述を詳細に見てみよう。

王女ということで生れの高貴さ、太陽との比較や “Nature had a joye her to behelde.” (80) という最大級の賛辞でその美しさが、美德に関しては、“trouthe” と “stidfastnesse” において比類がないことなど 14 行を費して示される。ところが、アルシーテの方は年齢と身分を示す説明が 2 行と、彼が “double” であることを強調する 3 行の記述があるだけである。だが、これだけで人物造型の要を満たしてはいる。なぜなら、この描写の目的は、アネリーダの “trouthe” とアルシーテの “doubleness” あるいは “untrouthe” という相反する性質を聴衆ないしは読者に提示し、二人のイメージを定着させることだからである。そして、この詩は、この後美德と悪徳の対立を前提として展開してゆく様相を呈する。したがって、この詩を “trouthe” と “untrouthe” の葛藤を通して、“trouthe” の困難さ、重要さを説き、聴衆ないしは読者にそれを慫慂すると同時に “untrouthe” を戒める寓意物語として読んでも、非難はできないかもしれない。実際、Wolfgang Clemen 教授はこれに近い読み方をしている。

In exemplifying man's *untrouthe* in this way, to bring out Anelida's *trouthe* more strongly, Chaucer had a further motive which recurs in his works; this was to state his belief in the value of *trouthe*. In Chaucer's eyes the 'false' lover was also sinning against the idea of love, against *trouthe* and so against virtue itself.⁶⁾

確かに、“trouthe”にチョーサーが重要な価値を認めていたという指摘は、十分に首肯できる。また、アルシーテの“untrouthe”を男性一般の本性として誇張した、あるいは飛躍した記述をしているのも事実である。

それならば、チョーサーは女性の聴衆ないしは読者にどのような教訓を説こうとしているのであろうか。恐らく彼女たちはそれを期待したであろう。だが、彼は教会の牧師やしたり顔の学僧のような言葉は吐かない。

Ensample of this, ye thrifty wymmen alle,
Take her of Anelida and Arcite,
That for her liste him “dere herte” calle,
And was so meke, therfor he loved her lyte.
The kynde of mannes herte is to delyte
In thing that straunge is, also God me save!
For what he may not gete, that wolde he have.

(197-203)

ここにはアルシーテの心がアネリーダから離れた理由が、男（あるいは人間）の本性に言及した形で述べられているが、注意しなければならないのは、男の裏切りに対する警告ばかりではなく、女の側の責任も暗示するような記述がなされている点である。すなわち、“for”と“therfor”の呼応関係が、この場合は重要な意味を含んでいることになる。同じような記述はこの詩の他の箇所にも示されているし、『名声の館』のディードーの挿話の中でも見られる⁷⁾。このようにどこから見ても歴然たる事実のように思えることがらの中にも、それを否定するような別の可能性を暗示する態度は、チョーサーの特徴でもある。これがわれわれを躓かせる原因でもあるし、作品に陰翳と深遠さを与える要因で

もあるが、同時に彼の人間及び物事についての理解が、単純なものではないことの証左でもある。

アネリーダの“trouthe”に対するアルシーテの裏切り行為は、誰の眼にも明らかで、弁護の施しようもない事実であると思われる。“trouthe”は人間にとって最も価値ある美德の一つであり、何人と雖もそれを否定するような異議を公然と唱えることはできない。しかし、人間は神ではなく、したがって完全ではない。神を規準とすれば人間は残らず罪人、すなわち、不完全な存在である。しかしながら、中世においては、『真珠』あるいはロマンス文学作品に見られるように、神のごとく清純に、信仰篤く、志操堅固に生きる人間が理想像として描かれた。チョーサーはそういう考えに対して懐疑的であった。より正確に言えば、理想と現実の人間の懸隔を明らかに自覚していた⁸⁾。この詩は、そのような自覚のもとに書かれた作品ではないかと思われる。それだからこそ、アルシーテの不実の理由として、恐らく人間（この場合は男）の不完全性をチョーサーは提示する必要があったのであろう。そう解釈すれば、上に引用したスタンザの終わり3行や、

... hit is kynde of man,
Sith Lamek was, that is so longe agoon,
To ben in love as fals as evere he can.

(149-151)

といった記述の説明が可能である。この詩は、更に、書物から獲得された断片的知識の状態から、経験を通して総合的なものへと血肉化されていったチョーサーの人間理解が、それにふさわしい表現手段を見出していないことを示しているかもしれない⁹⁾。『トロイルスとクリセイデ』と比べると、設定された状況の中で、登場人物たちが自由に行動したり、また、登場人物同士の絡み合いによって物語が展開してゆくというような、有機的な統一に欠けている。

III

ところが、アルシーテに対するアネリーダの「愁訴」の部分になると、チャーサーの筆が冴え、男に裏切られた女の心の動きがみごとに活写される。これは、アネリーダが自分の苦しい心の内を自ら認めて、アルシーテに送るという設定になっている。したがって、一人称で書かれ、時々アルシーテに対する呼びかけ“Thou”が入り、聴衆ないしは読者は、あたかも劇の独白を聞いている気分になせられたり、直接自分たちに語りかけられているような錯覚に陥る¹⁰⁾。

「序詩」では彼女自身の現在の心理状態が概括的に説明される。

So thirleth with the poynt of remembraunce
 The swerd of sorowe, ywhet with fals plesaunce,
 Myn herte, bare of blis and blak of hewe,
 That turned is in quakyng al my daunce,
 My surete in awhaped countenaunce,
 Sith hit availleth not for to ben trewe;
 For whoso trewest is, hit shal hir rewe,
 That serveth love and doth her observaunce
 Alwey til oon, and chaungeth for no newe.

(211-219)

幸福の絶頂から絶望のどん底に突き落とされた女の悲嘆、それまで信じて疑わなかった生活基盤の脆くも瓦解するのを目撃した衝撃、彼女が信条として守ってきた“trouthe”の無力を知った当惑などがここには描かれている。次に続く「第一節 (strophe)」では、彼女自身の貞節の証が示され、アルシーテの裏切りに対する恨み、非難が語られる。また、恨みを述べつつも、アルシーテが心をいれかえて彼女のところに帰って来れば許して責めたりしないと、いじらしい本音を覗かせたりもする。

アネリーダもまたディードーや黒衣の騎士やトロイルスと同じく、愛の神の下僕である。“trouthe”と美の精華のごとくに称えられた彼女が、今やその

“trouthe” ゆえに苦しみを強いられている。運命への言及はあるが¹¹⁾、運命の非情を恨む激しい言葉が彼女の口から吐かれることはない。彼女は理由がわからず途方に暮れながら、彼女自身に落度や至らぬ点を見つけようとさえするのである。

... for I shewed yow, Arcite,
 Al that men wolde to me write,
 And was so besy yow to delyte—
 Myn honor save—meke, kynde, and fre,
 Therfor ye put on me this wite.

(264-268)

ここにも、先に指摘した“for”と“therfor”の呼応関係が、皮肉な調子を醸し出している。述べられている内容は、一般的に言えば決して咎められるべき類の欠点ではなく、寧ろ称賛されてしかるべきものであるから。

Clemen 教授の指摘を俟つまでもなく、このアネリーダの嘆きは、チャーサーの芸術的な技倆の背後に、真正な人間の苦痛の肉声を聞かせてくれる¹²⁾。これは古今東西の誰にでも訴える力をもった声である。人間の深い悲哀を湛えた声を発せざるをえない女性を通して、チャーサーは何を語りたかったのであろうか。それを知るためには、“fals Arcite”の方に眼を向けてみなければならない。

アルシーテに冠せられた“fals”という語は、単にアネリーダの“trouthe”を引き立たせるための修飾語ではない。アルシーテの“doubleness”あるいは“falsnesse”は、アネリーダの不幸の原因として彼女の“trouthe”と同じ重みを有している。相対立するものの存在を常に提示するチャーサーの特徴については、既に述べた。ディードーがアエネアースの愛の誓言を信じたように、アネリーダもアルシーテの誓いを信じた。この信じるという行為が、裏切りという行為が成立するための前提としてなくてはならぬ条件である。信じるという行為が、最も純粋な形で行なわれるのが、愛においてである。純粋であるだけに、愛における裏切りは最も許し難い行為となる。

それでは、何故にそのような許し難い行為をチャーサーは描こうとしたのであろうか。それは、そういう物語においてこそ人間の姿を最も劇的にかつ最も忠実に描出しようと考えたからであろう。その考えは彼の総合的な——あるいは根源的な——人間理解から来ている。恐らく、不完全な人間を不完全なまま描くことが、彼の意図であろう。チャーサーが他の同時代の詩人たちよりも優れているのは、その詩の才能を別にすれば、この点である。一口に人間をありのままに描くというけれども、詩学的な技術上の問題はもちろん、詩人の克服しなければならない内的、外的な諸々の障害があって、簡単にゆくものではない。その中でも最も重要かつ不可欠なものが人間についての深い洞察である。それについて考察する前に、ここで不完全な人間を不完全なまま描くということの意味についてももう少し考えておきたい。

それは人間の不完全性を徒らに強調し、称揚することでは決してない。現実の人間を言葉を通して、できる限り忠実かつ的確に描き出すことである。チャーサー自身が『カンタベリー物語』の「総序」で述べている。

But first I pray yow, of youre curteisye,
 That ye n'arette it nat my vileynye,
 Thogh that I pleylnly speke in this mateere,
 To telle yow hir wordes and hir cheere,
 Ne thogh I speke hir wordes proprely.
 For this ye knowen al so wel as I,
 Whoso shal telle a tale after a man,
 He moot reherce as ny as evere he kan
 Everich a word, if it be in his charge,
 Al speke he never so rudeliche and large,
 Or ellis he moot telle his tale untrewē,
 Or feyne thyng, or fynde wordes newe.
 He may nat spare, although he were his brother;
 He moot as wel seye o word as another.

(725-738)

この創作態度には、近代のリアリズムに相通ずるものが観取できるかもしれない。しかし、両者はある一点において決定的に異なっている。それは、チャーサーの方には、彼の描く人物がどんなに野卑で、放縦で、不実であっても、その背後には最高にして完全な善なる、唯一の存在——神への中世に共通の信仰の文脈が厳然とあるのに対して、近代のリアリズムはそれを喪失したところから出発している点である。なお、中世には神の最高の摂理のもと “destyne, certes, departeth and ordeyneth alle thinges singulerly and devyded in moevynges, in places, in formes, in tymes.”¹³⁾ という運命観が支配的であった。人間としての完全性が低い者ほど、運命に翻弄される度合いが高いという考えが、ボエティウスに見られる¹⁴⁾。したがって、不完全な人間を不完全なまま描くということは、運命の変動の中に捕えられている人間を描くことになる。

この詩では、先にも述べたように、運命あるいは運命の女神への直接の訴えは見られない。しかし、今述べたような文脈の中で読むと、アネリーダもまた運命の女神の虜と考えられる。特に、次のような彼女の嘆きを聞くと、一層その考えが強くなる。

Almyghty God, of trouthe sovereyn,
Wher is the trouthe of man? Who hath hit slayn?
(311-312)

IV

“the trouthe of man” が信じられなくなるというのは、人間の言葉に嘘が含まれているからである。言葉は人間にとって唯一の意志疎通の手段であるのに、その言葉に虚偽が内包されているとしたら、人間は何を信頼すればいいのか。アネリーダの不幸も畢竟アルシーテの誓言を信じたことに由来することを考えれば、信じたアネリーダがその不明を責められねばならないことになる。確かに、ある意味ではアネリーダにも責められるべき非がないとは言えないのは、今までに見てきた通りである。だが、ここにはもう一つの重要な問題点が含まれている。

チャーサーは言葉と虚偽の関係を、この詩を書く前に既に『名声の館』において詳細に考究している。したがって、それとの関連において読んでみると、同様の問題点が歴然となる。すなわち、愛の悲劇は言葉の虚偽性に起因しているという、チャーサーの視点が明瞭に現われてくる。言葉が虚偽を含むということは、その発話者の精神が対話者の精神を蔑にしているということを意味する。いや、同時に発話者自身の精神をも否定しているのである。なぜなら、言葉とは精神と精神とを結ぶ“関係”にほかならないからである¹⁵⁾。精神との“関係”が稀薄になった時、人間の言葉に虚偽が入り込む。人間が虚言を必要とする時、精神は本来志向すべき目標を見失い、感情や欲望の嵐の中で佇立しているのだ。そこでは言葉は一つの道具ないしは手段と化してしまっている。道具であれば、精神の関与する余地のない“もの”であり、したがって、その使用に当たってはいかなる精神の苦痛も感じなくてよい。精神が関与しないということは、人間の本性とは無関係の“もの”であり、時間の中で消滅してしまう、空虚な記号でしかない。

精神との“関係”を欠くということが、何故にこのようなことを惹起すると言えるのであろうか。人間の本性を“the soule, which that hath in itself science of gode werkes.”¹⁶⁾と規定する、中世における人間理解がその根底にあるからだ。更に、その人間理解は“men that ben semblable to God by [their] resonable thought.”¹⁷⁾という、神との“関係”に基づいている。人間の精神と精神との“関係”が重要でかつ本質的でありうるのは、精神と神との“関係”がその間に介在しているからである。したがって、人間が完全であると言えるのは、自己の精神と神（あるいは創造主）との“関係”を自己の理性において結んでいる時だけである。その時にのみ、人間は運命の車輪の外に超然として立つことができる。しかし、これは人間の原理的な理解であり、現実の人間は抽象的な観念ではなく、あらゆる欲望を内に秘めた生命体である以上、聖人と雖も常に完全な“関係”を保持することは不可能である。チャーサーも十分にそのことは承知していたからこそ、アネリーダも運命の虜として描こうとしたのであろう。チャーサーの後の作品に現われる人物たちは、このような人間理

解の結果創り出されたものであろう。中世の類型化した人物ではなく、一人ひとりがそれぞれ個性をもった人間として描き出されるためには、人間についての原理的理解と現実的理解の双方に基づいた調和——すなわち、総合的な人間理解が必要である。なぜなら、人間の中に純粹に精神的なものを希求する性質と、物質的なものへ牽引される性質が存しているから。

恋愛の問題を精神の“関係”という観点から捉えるのは、奇異な印象を与えるかもしれない。しかし、中世においては人間の精神性が重要視され、強調されたことは周知の事実であり、かつ“*contemptus mundi*”¹⁸⁾の思想が一般的に流布していたこともよく知られているところである。それは、他方においては物欲に心を奪われた人間社会の非精神的な現実が存在していたことの証拠でもあろう。その一大縮図をダンテの『神曲』の中に覗き見ることができる。人間の中に相反する二つの性質が内在していることは、チョーサーならずとも数多の人々が経験によって認識していたはずである。しかし、公的には物質的なもの、非精神的なものの存在は常に嫌悪され、否定され続けた。他方、精神的なものは称賛の的となり、すべての人間が追求すべき善なる存在として、中世までの精神史に君臨し、華やかな足跡を残した¹⁹⁾。今なおその傾向は根強く残滓を留めている。そのために、個人的にはその対立が苦悩と煩悶の種子となった。この対立する二つの性質には様々の名称が与えられてきた。美德と悪徳、幸福と不幸、真実と虚偽、誠実と不実、正義と邪悪等々。これらすべての観念は精神性と非精神性の対立の表現として理解できる。したがって、人間の歴史も根本的に二つの対立する性質の表象という観点から見ることでも可能であろう。中世の文学作品に描かれた世界にも殆ど同様のことが言えるように思われる。

“関係”の概念をチョーサーが自覚していたことを示す、明確な記述はない。また、他の中世の作家、詩人もそういう考えを述べていないかもしれない。しかしながら、“関係”の基本概念が、『トロイルスとクリセイデ』をはじめとして各作品の中に散見せられるのである。特に、チョーサーには『哲学の慰め』の翻訳がある。これに記された新プラント主義の哲学は、その人間の規定の仕方、神あるいは創造主及び現実世界の諸事との根本的な関わり方の説明に関し

て言えば、正しく“関係”の哲学にほかならない。ボエティウスの考えに基づいた“関係”の解釈は既に述べた通りである。

V

チョーサーは最初、テセウス、“the olde Creon”などの織りなす、政治的、軍事的な事件を背景として、アネリーダとアルシーテの愛の悲劇を描く、叙事詩的恋愛詩の構想を持っていたのかもしれない。しかし、何らかの理由で途中で断念せざるをえなかった。その最大の理由の一つは、彼の総合的な人間理解を作品として具現化しうる可能性が失くなったからであろう²⁰⁾。すなわち、登場人物と設定された状況とが遊離してしまい、膠着状態に陥ったものと考えられる。

チョーサーのその後の詩人としての成長を見ると、この詩は未完であるけれども、あるいは、未完であるがゆえに、主題の点でも詩法の点でも、様々の問題を含んだ重要な作品であるように思われる。John Gardner は技術的な面について次のような見解を述べている。

The absence of a narrator ... suggests a technical stage transitional between Chaucer's use of omnipresent narrators in the early poems and his skillful handling of an unobtrusive but sharply characterized narrator who can fade his voice in and out as Chaucer does in the *Troilus and Canterbury Tales*.²¹⁾

主題に関して言えば、アネリーダとアルシーテの人物の造型の仕方から、人間をいかなる視点から描くかということを、彼は確かに感得したことが窺われる。

したがって、これは、愛における誠実と不実、言葉における真実と虚偽について、紆余曲折を経ながら考え続けたチョーサーが、人間の精神性と非精神性の問題として、総合的に判断できるようになってゆく、過渡的な段階の作品であると思われる。確かに、こういう考え自体は新しいことではないし、チョーサーもボエティウスや他の哲学者たちの書物を読んで知っていたことであろう。しかし、単なる知識から確信へと変わったとしたなら、そこには意識において

比較にならないほどの差があるはずだ。そうであれば、この詩はチャーサーの内面的な転回点を示唆する、契機的な作品として、彼の作品全体の中に位置付けられてもよからう。

ここで述べたような、あるいはそれ以上の深い人間理解がチャーサーになかったならば、『トロイルスとクリセイデ』における絶妙な心理描写も『カンタベリー物語』における様々な階層の人々の個性的な人物描写も、生まれることはなかったであろう。しかし、それは、当然のことだが、チャーサー個人の才能によってのみ無から突然に創り出されたものではない。彼は彼自身が培われた伝統の肥沃な土壌の中に新しい種子を蒔いて、時代にふさわしい果実を実らせる作業をしたにすぎない。この作業ができるのは、成熟した精神をもった詩人に限られていることは言うまでもない。逆に言えば、チャーサーの人間理解が伝統の中に根を下ろしていたからこそ、そうした作品が生まれたとも言える。

Notes

- 1) *The Works of Geoffrey of Chaucer*, ed. F.N. Robinson, 2nd ed. (London: Oxford University Press, 1974), p.303. Quotations from *Anelida and Arcite* and Chaucer's other works are taken from this.
- 2) *Ibid.*, pp. 788-789.
- 3) Cf. J. I. Wimsatt says: "It seems probable to me furthermore that had Anelida's poem been finished her complaint would have resulted in comfort being provided, probably in a separate 'Comfort' spoken by the loved one, as in *Fonteinne amoureuse*." "Chaucer and French Poetry," in *Writers and their Background: Geoffrey Chaucer*, ed. Derek Brewer (London: G. Bell & Sons, 1974), p.125.
- 4) Cf. Wolfgang Clemen, *Chaucer's Early Poetry*, trans. C. A. M. Sym (London and New York: Methuen, 1981), p.199.
- 5) Clemen says about the "Invocation": "As in the *House of Fame*, we see Chaucer setting a massive apparatus in motion to serve a very minor cause." *Loc. cit.*
- 6) *Ibid.*, p.204.
- 7) *House of Fame*, 269-292.
- 8) Cf. C. S. Lewis says: "Chaucer and his audience knew, better than some know now, that human life is not simple. They were able to think of two things at once. They see the common world outside the charmed circle of courtly love; they also have been in that common world and will be there again; and they let it have its say, its 'large golee', for a moment, even amidst their ardours and idealisms." *The Allegory of Love: A Study in*

Medieval Tradition (1936; first issued as a paperback, 1958; rpt. London, Oxford and New York: Oxford University Press, 1975), p.173.

- 9) See Clemen, p.198.
- 10) *Ibid.*, pp.207-208.
- 11) “destinee” (243, 339, 348), “aventure” (324), “chaunce” (348).
- 12) Clemen, p. 206.
- 13) *Boece*, IV, pr. 6.
- 14) *Ibid.*, III, pr. 10.
- 15) For this idea I am indebted to Sören Kierkegaard, *The Sickness unto Death*, trans. Walter Lowrie (Princeton: Princeton University Press, 1954).
- 16) *Boece*, II, pr.7.
- 17) *Ibid.*, II, pr.5.
- 18) Willard Farnham, *The Medieval Heritage of Elizabethan Tragedy* (Oxford: Basil Blackwell, 1970), II-IV.
- 19) Cf. Arthur O. Lovejoy, *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea* (1936; rpt. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1978), I-III.
- 20) John Gardner says that the “absence of a narrator” is “the whole cause of the poem’s failure.” *The Poetry of Chaucer* (1933; rpt. London and Amsterdam: Feffer and Simons, 1977), p.73.
- 21) *Loc. cit.*